

論文の要旨

論文題目 現代日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」
意味論と語用論の接点を求めて

氏名 松岡 みゆき

学位 博士（文学）

授与年月日 平成 19 年 10 月 31 日

本研究は、現代日本語の終助詞「よ」と「ね」、それらが形態的に複合した「よね」を考察対象とし、各形式が持つ抽象的な機能と、そこから具体的な語用論的機能が生じるメカニズムを明らかにしたものである。また、「よね」については、機能的にも「よ」と「ね」の複合かどうかという構成性の問題について考えた。

第1章では、「よ」も「ね」も、文末用法（終助詞としての用法）以外に、語頭・語中に現れる間投用法があることを確認し、そのうえで本研究の考察対象を終助詞に限定することを述べた。終助詞として使用される場合と、間投助詞として使用される場合の機能が、単純に同一のものとは考えにくいという、終助詞としての使用例だけを見ても、その分布の仕方、機能は簡単に結論付けられるものではないためである。

第2章では、終助詞「よ」と「ね」に関して、これまでの研究で明らかにされたことを整理し、残された問題点を指摘した。これまでの研究については「よ」または「ね」を、1)具体的な（複数の）用法と直接結び付けるもの、2)情報の帰属先、または情報の多寡を示す形式として考えるもの、3)知識管理・情報処理の仕方という観点で記述するもの、4)コミュニケーションを円滑にするための対人的態度であるとするもの等がある。いずれの研究も「よ」または「ね」の一側面を捉えたものであり、その意味記述では説明できない用例が存在する。そこで本研究は「よ」「ね」を包括的に説明できる、より抽象的な意味記述を試みた。そして、その抽象的な機能から、先行研究で提案された意味・機能が生じるメカニズムについて考えた。

第3章では、「よ」「ね」がどのような情報をマークしているのかを、情報帰属理論（話し手帰属情報か聞き手帰属情報か）を土台にし、そこから外れる分布を検討するという方法で考察した。その結果、「ね」は、話し手が聞き手と「話題」を共有している場合（言い換えれば、聞き手にもアクセス可能な「話題」が設定されている場合）に使用可能となることがわかった。つまり「話題」の共有が「ね」の前提条件となっているのである。そして結果的に、この「ね」の前提条件は、次の第4章の考察によって導いた「ね」の抽象的機能とも矛盾しないことがわかった。情報帰属理論をはじめとして、これまでの研究の中には、「よ」「ね」がマークする情報の共有性に注目したものがあつたが、本研究は、「ね」が使用可能な場合に、話し手と聞き手が共有しているのは、「ね」がマークする情報自体

ではなく、その情報の言及先となる「話題」であることを示した。話し手と聞き手が共有している「話題」として考えられるのは、1)発話現場の発話時の外界情報、2)1)の一部として位置づけられる「聞き手」の存在、3)先行発話によって導入された情報の3つである。これらのいずれかが「話題」として設定され、その「話題」に言及する場合に「ね」の使用が可能となるのである。

第4章では、「話題」の共有という前提条件をクリアした「ね」が、どのような機能を果たすために使用されるのかを、「ね」の分布（義務化される場合、任意に使用される場合、使用できない場合）を検討することによって明らかにした。その結果、「ね」は、発話現場（談話場）で「話題」に対して言及する（「話題」に情報を導入する、情報を更新する）操作を示すマーカーであることがわかった。その操作が、談話場でおこなわれているため、そこにいる聞き手も当該の「話題」にアクセス（介入）できる。本研究は、この「ね」の抽象的機能を次のように記述した。

「ね」の抽象的機能

「ね」は当該の情報を「開いた情報」（「現場性を持つ情報」、「live knowledge」）として示す形式である。「開いた情報」とは、談話場内で「話題」としてとりあげられた情報に、新たに追加する情報であることを意味する。

そして、この「ね」の抽象的機能から次の3つの語用論的機能が生じることがわかった。

「ね」の語用論的機能

- 1)ダイクシスの機能
- 2)思考過程表示機能
- 3)聞き手の介入促進機能

「ダイクシス機能」とは、談話場に存在する言及対象（話題）を指し示す機能である。外界情報を指し示す現場指示的な場合と、先行発話を指し示す文脈指示的な場合が含まれる。

「思考過程表示機能」は当該情報を「思案しながら」または「当該情報の内容を想起しながら」発話しているという解釈を与える機能である。この2つの語用論的機能が談話場で生じているため、その場にいる聞き手の介入を促す「聞き手の介入促進機能」が生じる。聞き手の注意喚起機能を持つ上昇調を用いると「聞き手の介入促進機能」が顕在化する。

疑問文では、「ね」はその語用論的機能（思考過程表示機能、聞き手の介入促進機能）を付与するために用いられる。働きかけ系の文の場合は「聞き手の介入促進機能」を付与することが「ね」を使用する動機付けとなる。これは働きかけ系の文に「ね」が付いた場合、上昇調が付随する傾向があることから裏付けられる。

第5章では「よ」について考察した。その結果「よ」は「ね」とは対照的に次のような機能を持つことが分かった。

「よ」の抽象的機能

「よ」は情報を話し手の中で確定し、知識化した情報として示す形

式である。これを「現場性を持たない情報 (non-live knowledge)」、
または「閉じた情報」と表現する。

「よ」は付随するイントネーションが上昇調か断定調（下降調）かによって、大きくその働きが異なる。上昇調の場合は、当該情報が不確定なものであると解釈されるのを阻止するために、「よ」を義務化して情報を「閉じる」。上昇調が付随する場合、次のような語用論的機能が生じるが、これは上昇調によるものであり、このとき「よ」が担っているのは当該情報を確定したものとして示す働きである。

「よ」が上昇調を伴う場合の語用論的機能

- 1) 聞き手の注意を喚起しながら情報を提供する（報告機能）
- 2) 当該情報を入手した上で適切な認識・行動をとるよう聞き手に指示する（指示機能）

一方、下降調の場合は、「よ」で情報を「閉じる」ことにより、次の2つの語用論的機能が生じる。

「よ」が下降調を伴う場合の語用論的機能

- 1) 情報を発話する際の話し手の感情を顕在化させる（感情表出機能）
- 2) 当該情報を、話し手が判断・判定したものとして示し、「事実」としての解釈を背景化する（判定機能）

また、疑問文において「よ」は下降調を義務化し、当該の疑問文を「詰問・反語」として提示する。働きかけ系の文で、下降調を伴う「よ」が用いられると、当該の働きかけがなされるべき状況にあることが示唆される。上昇調を伴う場合は、聞き手の注意喚起機能が付与され、「よ」は「閉じる」働きのみを果たすことになる。

第6章では、「よ」と「ね」を形態的に構成要素として持つ複合終助詞「よね」について考察した。「よね」については、これまで、機能的にも「よ」に「ね」を足したものとする見方と、「よね」を個別の形式とする見方があったが、「よね」の構成性については、どのように考えるのが妥当であるのか、明確な答えは出されていなかった。そこで本研究では、「よ」の機能、「ね」の機能との共通点と相違点を明らかにし、「よね」の機能とその構成性に対して、次のように考えるのが妥当であると結論付けた。

「よね」 = 「よ」の抽象的機能 + 「ね」の語用論的機能

つまり、「閉じた」情報を、話し手の思考過程を示しながら聞き手に伝え、それにより聞き手の介入を促すのが「よね」の機能である。このように「よね」を捉えることにより、「よね」の間にポーズがあるかどうかで生じる発話の容認度の違いや、「*ねよ」という承接関係が認められないことについて説明が可能となることを示した。

以上のように、本研究は、発話の現場（談話場）を時系列的な領域であると捉えることによって、「よ」と「ね」の抽象的機能として妥当な記述が可能になり、各終助詞の包括的説明が可能になることを主張するものである。また、それを記述するのに、本研究では談話場を時系列的談話領域として概念化した Langacker (2000, 2001) の Current Discourse

Space (CDS) モデルを用いた。そして、「よ」「ね」の各抽象的機能が、ある条件下で具体的な解釈(語用論的機能)として実現するシステムを示した。このように本研究では「よ」「ね」「よね」の基本的な使用実態を包括的に捉えられる記述がおこなえたのではないかと思う。